

経を唱えた。また、平成十年には平壤を訪問し、キリスト教会巡りをして、奉天から安東に行くときの恩人を捜すも会えなかった。錦州でも長男を埋葬した女学校跡に参って小石を持って帰った。慰霊の旅はまだまだ続いている。

満州国の崩壊と通化事件

東京都 鎌田昌夫

一 父の待つ満州へ

昭和三年八月二十日東京で呱呱の声を上げた私は、昭和十年四月東京の小学校に入学したが、間もなく父の赴任先の満州に行くことになった。父は農商務省から農林省、内閣資源局と移籍、更に日本の大陸政策に呼応して関東軍特務部の軍属として渡満していた。

母と私、そして二つ下の妹の三人で、下関から関釜連絡船「扶桑丸」で海を渡り、釜山で特急列車に乗り継ぎ、着いたところは新京であった。初めて異国の大

地に降り立った私たちは、満人の服装、言葉、仕草に目を見張ったばかりでなく、満人特有のにおいに外国にきたという思いをいやが上にも感じたのだった。迎えに来た父と馬車で陸軍官舎に向かったが、途中の広い道路と赤レンガの建物が珍しく、子供心にも大陸にきたということを身近に印象づけたのだった。

二 満州での生活

父は、関東軍司令部の特務部で移民の仕事を行っていた。司令部の外観は日本の城を思わせる巨大な建物で、大満州に君臨する無敵関東軍の威容を誇るに足るものであった。

私は付属地にある西広場小学校に転校の手続きをやって通学することになった。新京は満州国の首都だけあって、街路は広く整然と良く整備されていたので、町へ出掛けるときは気持ちが良い、気分もおおらかになった。

その後、十二年八月、父が満州国の奉天省事務官に転出したので奉天に移住することになった。渾河河畔の砂山に近い郊外の閑静な弥生町に居を定めた。住宅

の東側には畑があり、家庭菜園の好きな父は勤めから帰ると、その栽培が楽しみで日課になっていた。私も新鮮な野菜の収穫には喜びを感じていた。

小学三年の私は高千穂小学校に転校した。校舎は新しく広々としていて毎日の通学が楽しみであった。学校から帰るとカバンを投げ出し、砂山に遊びに行くのが楽しみだったが、そこにはトカゲや蛇がたくさん住んでいた。蛇は青大将で一メートルぐらいのものもいたが、首に巻いたりしてよいオモチャになった。

奉天で約二年間を過ごしたが、十四年三月、父が少し北の開原街長に転勤となり、開原小学校五年に転校した。ここは新京、奉天とは街の環境が全く異なり、元々農産物、特に大豆の集散地であったので、早くから日本の特産商等が住み着き、小学校も明治の終わりのころには開校していた。そのためか住民の人情は厚く、原住人との融和も進んで五族の人心はまとまっていた。街の近代化は遅れていたが、緑の多い街であり、また、地下水が豊富で水質も良く、線路ぎわの緑の中にそびえる給水タンクは街のシンボルになっていた。

た。その良質の水を利用して日本酒「源氏」が東洋醸造で造られていたし、また、満州中央銀行紙幣に使われた用紙も、鉄西の豆桿パルプの製紙工場で、大豆の豆ガラを原料にして豊富な水で造られていた。

三 旅順中学から奉天農大へ

開原で小学五、六年を過ごした私はいよいよ中学に進むことになった。父の考えで、体格の悪い私は、気候の良い関東州の旅順中学に入るようになった。旅順中学は寄宿舎が整備され、満州各地の子弟が多く入学していた。日露の激戦が行われた旅順には、中学のほか女学校に工大、高校、師範、医専があり、気候も温暖で文教都市として恵まれた町であった。

旅中は質実剛健の校風を持つ伝統ある学校で、それだけに厳しく、鉄拳制裁では他に類を見ないほどだった。特に寄宿舎では上級生に対しては絶対服従で、そのため説教がすさまじく憂うつな日が多かった。それでも桜のころには観桜会、中秋の観月会、秋のウサギ狩り、土曜日は豚マンの日と楽しみも少なくなかった。

入学したところは英語をはじめ中学課程の授業が普通に行われていたが、その年の暮れ十二月八日に大東亜戦争が勃発した。緒戦の日本の活躍は目覚ましく、学校から帰ると寄宿舎のロビーで、連日の戦果発表の新聞に胸をときめかせて見ていた。しかし次第に戦時色が濃くなって、敵性の英語、中国語の時間が削減され、それだけ教練の時間が多くなった。

戦争は次第に激化の道をたどり、翌十七年六月のミッドウェー海戦が転機となり、日本が守勢に立たされるに至って、学校も戦時体制に移行して授業の合間に勤労働員が始まり、土城子飛行場の構築、甘井子の満州化学工業の現場要員、巖子窟イシノクの対空監視などに掛けた。土城子では炊事当番を引き受け、みんなの食事の世話を懸命に行った。満州化学工業では、火薬の原料である硝塩の反応釜の調査反応監視に、鼻をつく強い刺激臭をもつともせず四人一組の昼夜交替で頑張った。

戦争も末期の昭和二十年春、戦時特例で中学四年生は一年繰り上げて卒業ということが決まり、動員先か

ら希望する上級学校の受験に出掛けたが、その年は内地の学校を受験することはできなかった。

私は満州緑化の理想に燃え、国立奉天農業大学林学科を受験、合格することができた。大学は日、満、蒙、鮮系の共学で奉天郊外の北陵にあり、全寮制であった。七月半ば、戦争の激化で夏休みもこの年は取り止めになったが、体の不調を理由に帰省を願いだした。

一方、父は開原街長から昭和十八年四月、満洲里市長に転出、更に、翌十九年七月からは熱河省承徳で副街長を務めていたが、終戦直前の七月の異動で新京の祭祀府へ転勤を命ぜられていた。そこへ帰った私は、引越しを手伝い、両親と弟たちの四人で承徳を後にし、翌日には新京に着いたが、官舎が決まるまで順天区の知人のところへ世話になることになった。

四 ソ連の参戦と疎開

それから数日たった八月九日未明、突如として空襲警報のサイレンが市民を驚かせた。朝になって市内の数カ所が爆撃され、ソ連の参戦によるものと分かった。市民は事の重大さに不安をかくし切れず、ただ関

東軍が頼みの綱であった。それも断片的な情報では、既にソ連の機甲部隊は国境線を随所において突破、南下を続けており、対する関東軍の防衛線は阻止する力が全くなく、怒濤の進撃の前にさらされてしまっていた。

間もなく疎開が始まったが、不安動揺せる市民は極度の混乱に陥っていた。十一日になって宮内府及び祭祀府の職員の一部は、家族と共に満州国皇帝に随行して通化に疎開することを命ぜられた。十二日夕刻、新京駅に集合したが、構内には奥地からの避難民やこれから南下せんとする邦人たちが、いつ出るか分からぬ列車を求めて右往左往、阿鼻叫喚のるつぼと化していた。特別列車に乗り込んだが、それを羨望と怨念の眼で見られたときの申し訳なき、職務上のこととはいえ、実に辛い思いであった。深夜零時を過ぎるころ列車は動き出した。波瀾万丈の運命が待ち受けていることも知らずに、東新京駅で皇帝がご乗車になり、一路列車は通化へと向かった。東新京を過ぎると車窓いっぱい、紅蓮の炎が事態の重大さを暗示するかのよう

に映っていた。列車は時折、停車を繰り返しながら、吉林、梅河口を経て通化についたのは十三日も夕刻であった。そして列車は更に奥地の臨江を経て、目的地の大栗子駅に着いたのは十四日の朝であった。

五 敗戦と私たちの存在

そこには東辺道開発の大栗子鉱業所があり、日系職員の社宅が整備されていた。皇帝は仮御所と定められた所長社宅に落ち着かれ、随員たちは社宅の半分を提供してもらい、それぞれ二、三家族ずつ分かれて住むことになった。

手荷物の整理が終わると周辺の散策に出掛けた。すぐ近くを名にし負う鴨緑江が悠々と流れ、対岸には北朝鮮の山々が黒々と続き、その山すそに小道が走り、小さな部落が点在しているのが望見された。満州側は河原が広がり畑となり、山芋をはじめ茄子、トマト、胡瓜などの夏野菜がたわわに実をつけていた。

今後、我々は相当な期間この地にご厄介になることが予想されるので、地元の人々との融和が必要で、そのための交流を考えなければならなかった。

そこへどこからともなく「明日の正午、天皇陛下下の重大放送があるそうです」というニュースが伝わった。重大放送とは何だろう、と気掛かりであったが、それよりも我々には差し当たっての明日の朝食が問題であった。

明ければ八月十五日、あちらこちらで共同炊飯が始まっていた。山間にただよう早朝の清冽な空気の中で、立ち上る一筋の煙は平和そのものという気分さえ感じられるのであった。

やがて唯一の情報源であるラジオを聞いた人から重大放送の内容が知らされた。「日本が無条件降伏をした」という内容であった。とても信じられない、デマ放送ということも考えられるではないか。半信半疑のまま、暇な私は川の方へ出掛けた。ふと対岸を見つめると部落の家々には日の丸が立っているではないか、私は目を疑ったがまさしくそうだ。足早に帰って話をしたが相手にされなかった。後で分かったことであるが、日の丸は実は韓国の国旗だったのである。今までお目に掛かったことのない韓国の旗は、遠方から見ると

限り真ん中の「巴」はただの丸にしか見えなかったのである。それにしても韓国民の変わり身の早さに驚いたのであった。

六 満州国の終焉と皇帝の亡命

さて満州国はどうなるのであろうか、我々の生命はと、不安は増幅していくのだった。十七日になり仮御所に御前会議が召集され、皇帝の退位と日本への亡命、そして満州国は解体され、政権は一時治安維持会の手にゆだねられることが決まったのは、十八日の午前一時を過ぎていたという。朝になって床についたはずの各大臣、参議などだれ一人として姿が見えなかったことを聞いて驚いた。張國務総理も、宮内府大臣もいち早く退散し、逃げ足の速さというか行動の機敏さは、遠い昔からの経験、伝承がそうさせたのかと、ただ呆れたり感嘆するばかりで、王道楽土を夢見たものの結末としては情けないものであった。

また、特別列車の警護は満州国軍の兵士と日本軍憲兵によって行われてきたのであるが、最後には満州国軍の兵士は遁走してしまい、皇帝の身辺はすべて日本

憲兵の警護するところとなっていた。

翌十九日に皇帝は日本に向けて出発されることになった。出発を前に、お供してきた宮内府と祭祀府の職員及び家族を集められ、皇帝は静かに「皆さん、長い間お世話になりました。私は心から満足し深く感謝しております。これから私は日本へ参ります。皆さんも日本に帰られたら、必ず訪ねてきてください。ここは大変不便なところで、ご苦労も大変だと思いますが、十分健康に注意してください。先程聞いたところによりますと、小林菜長の奥さんが、今朝出産されたというのですが、母子ともに健在ですか？ 自分の手元にくらか医薬品も持ってきておられますから、必要でしたらそれを使って十分に保養してください。本当に長い間、自分のために行動を共にしてください。ご苦労でございました」と通訳官が通訳し終わると、あちこちからすすり泣きの声が起こった。別れの言葉述べられた溥儀氏（退位されたのでこう書かせていた）は門の方へ歩を運ばれ、警護の憲兵の肩に手を掛け抱きつかんばかりに「ここまでよく自分を守って

くださってありがとう」と、涙ながらにねぎらわれて、真っ赤な御料車の人となられたときは夜も大分更けていた。

溥儀氏のご心中、いかばかりかと察するに余りがあった。ちょうどそのころ暗やみの山の上で灯火の点滅するのが望見された。それは対岸の北朝鮮に、出発されたことを知らせる灯火信号だったのであろう。何か不吉な予感が私の脳裏をかすめたのだった。

溥儀氏はその後、大栗子駅から特別列車で通化へ向かわれ、小型機で奉天へ飛ばれ、そこで大型機に乗り換えられ日本に向かわれることになっていった。その間、大栗子に残留した職員と家族は、不安と苦悩の日々を送りながらも溥儀氏の日本安着の報を待っていた。二十日以降は電話も不通となり、二十三日からはついに頼みのラジオも入らなくなっていたが、二十四日になって溥儀氏抑留の報が入った。奉天上空でソ連機により強制着陸を命ぜられ、ソ連に抑留されたのである。不吉な予感が現実のものとなってしまい、一同肩の力が抜けてしまった。

七 残された我々の運命

何とか生きる道を見いださねばならぬと、宮内府と祭祀府から元気のよいもの八人が選ばれ、新京へ連絡のため行くことになった。父もその一人に加わった。

そのころ、ソ連軍は通化まで進駐していた。一行は悪戦苦闘した揚げ句に、新京にたどり着いたのは二十八日の夕刻であった。早速、八方手を尽くして大栗子に残してきた皇族及び職員、家族の救出策を考えようであるが、名案もないまま、情勢は刻々と悪化していった。何とか一刻も早く通化まで救出しなくてはとの願いをこめて、父のほか四人の者が大栗子へ向かうべく新京を後にしたのだったが、途中、梅河口で現地人にだまされ身ぐるみはがされてしまい、しかも四人が離ればなれになり、とうとう目的を果たせずほうほうの態で、再び新京へ舞い戻る結果となり、ついに大栗子の職員、家族の救出は断念せざるを得なかった。

その後父は、旅順の女学校に行っていた妹が心配になり、中国人にふんして列車で大連に潜り込み、旅順から強制退去させられ大連の知人宅に身を寄せていた

妹を捜し当て、男装したうえに、髪を切り顔にすそを塗り、中国人に紛れて列車で新京に連れ戻り、自活の道を選び帰国の口を待っていた。

一方、大栗子に残された者たちは、何をするでもなく悶々の日々を送っていたが、運んできた物資のうち、砂糖や小麦粉、食用油などの配給の日は、みんなにこにこ顔であった。私の宿舎は二階建て、八戸一棟の社宅の二階で、同じ棟の一階には皇帝の弟の溥傑さん夫婦に、妹の二格格（アール・ゴーゴー）、三格格（サン・ゴーゴー）などの側近たちが住んでおられ、一日中にぎやかな声が聞こえていた。

九月に入ると治安が悪くなり始め、交替で夜警をするようになった。わずかな持ち物であったが、大事な現金と預金通帳などは天井裏に隠した。十七日になって初めて大栗子に自動小銃を持ったソ連兵が現れ、恐怖の的になった。

二十日には通化の情勢がもたらされ、省および市の日本人幹部が一斉に逮捕され、どこかに拉致されて人心が動揺しているとのことだった。我々も一層夜警を

強化せねばならぬと話し合ったが、折しもその夜は、中秋の名月の前夜で、空気は澄みきって皓々と照らす月の光に、しばし旅順の寄宿舎での「観月会」の楽しかった思い出が脳裏をよぎるのだった。

翌二十一日になって、朝から我々の宿舎の周囲には、いつもと違って農民らしき者たちが三々五々、手にてんびん棒、草刈り鎌などを持ってたむろしているのが見受けられた。何事かと胸騒ぎを覚えたのも束の間、教養の銃声を合図に略奪が始まった。二階からはその様子がよく分かり、腰をかがめて相手から感づかれないように見ていたが、先ず始めに金目の衣類などを持ち出し、夜具、家財道具と最後には畳の類まで奪っていった。その間、二階の我々の所へも上がってきた。玄関をドンドンやっていたが、鍵を開けずに静かにして、留守を装っていたので、辛い難を逃れることができた。十余年にわたる庄政と横暴に対する反発だと、あきらめの心境で抵抗する者もいなかった。それにしては波状的にやってくる暴民のあさましいほどの強奪ぶりに、歯ぎしりを押さえているだけだった。

夜になって騒ぎも収まって安心してしていると、階下の一人から「日本人はみんな駅の方に避難したから、あなたたちも行きなさい」と教えられ、慌てて隠したものを探し出し、両手に持てるだけ持って外に出た。

「そんなに持って行くと途中で襲われますよ」と忠告を受けたので、最小限、必要なものを残して途中の河に投げ捨てて駅に急いだ。駅前の倉庫には多くの日本人たちが着の身着のまま土間にうずくまり、恐怖の覚めやらぬ様子で、ただおののいていた。不安の夜が明けて、外には中共軍の兵士らしきものが、時折、執拗に襲ってくる暴民から我々を守るべく銃を発射して威嚇していた。

やがてホームに列車が入り、乗車の命令が出され、一同悪夢の大栗子を後にしたが、まだその先は全く予想がつかず不安は募るばかりであった。間もなく臨江に着き下車させられた。街には至るところ「光復」の文字が目につき、解放を祝っている様子だった。

持ち物の検査を受け、今まで同胞であったはずの大衆の見守る中を、列を連ねて旧臨江劇場へ向かい収容

された。この劇場も暴民の略奪を受けたのか、座席など相当に破壊され見る影もなかった。千人を超える人々がそう広くもない所へ入れられたのだからたまらない。身動きもままならぬ三日間が続いたが、その間にソ連兵の女狩りが横行し、若い女性たちは断髪をし、顔にすすを塗り男のズボンをはくなど、自衛におおわらわであった。

四日目にまたしても移動である。今度は、臨江の街から山道を上った煙筒溝という鉱業所の、廃墟にも似た病院跡である。ベッドもマットレスも無く、窓ガラスも半分は割れたままで、朝晩は秋風も冷たく夜露をしのぐだけのものだった。ここでの生活はそれこそ生きるための最低のもので、乳幼児の栄養失調による犠牲者が何人出たであろうか。食事はトウモロコシの粉にわずかな大根の葉を刻んで入れ、塩味をつけたもので、それも粉が発酵しており、複雑な味のものであった。大人は我慢して食べるが、子供が食べないので困っていた。それを知った満人たちは白米の握り飯やゆで卵を手籠に入れて売りにきていた。子供を持つ親は

なけなしの金を払い買って与えていた。そうでもしないと飢え死にするのは目に見えていたのである。

八 地獄で仏に

十月も半ばになり、秋風も冷たく夜は寒ささえ覚えるころ、待ちに待った救出の手が差しのべられ、通化在住の邦人の方々の厚意に甘んずることになった。一同は、地獄で仏に会うとはこういうことなのかと、小躍りして喜んだ。

私と母、弟の三人は通化でいう下町の、穀物を商う丸三洋行に、宮内府と祭祀府の職員家族など二十数人と共にご厄介になることになった。他の大多数の職員や家族たちは山の手の官舎に別れて世話になった。

落ち着く間もなく、そこのご主人とみんなて集団生活の道を相談した。先ず手始めに近くの満人の醸造所から醬油を仕入れ、私たち若者が担いだり籠に積んだりして満人の家庭に売り歩いた。言葉も片言ながら何とか商売になったが、犬の出迎えにはほとほと手を焼いた。そのうちに同業者も多くなり、うま味がなくなり転業することに決めた。ある奥さんの発案でピロシ

キ（肉と野菜を餡にして油で揚げたロシア風パン）を作って売ることにした。パンといってもイーストなどあろうはずはなく、ただ小麦粉を薄く焼いて、肉と野菜の炒めたものを包み、パン粉をつけて油で揚げ、冷めないように箱の中に布団をひき、くるんで売りに出掛けた。味はうまいのだが、彼らにはなじめないのか、業績は芳しくなかった。

次に考案したのがアクセサリー人形売りで、端切れを利用して今でいう趣味の人形を作り、棒につるして街角に立った。行き交う満人たちはげげんな顔をし、中には薄笑いさえ浮かべて通り過ぎる者もいた。考えてみると、彼らにとって人形は葬式の副葬品として考えられていて、過去、何度か彼らの葬列に遭遇したが、ドラ、シンバルを奏でながら、白い布をまとった後ろ向きの泣き女たちが両脇を抱えられて続き、その後、周りを派手な緞張で箱型に囲んだ棺が十人余りに担がれて続き、確かに人物や動物を象った張りぼてを持ち、ついて行くのを見ていたので、無理からぬことと苦笑したのだった。

九 国共内戦と関東軍

そのころ国府、共産の両勢力が地下工作でしのぎをけずっていることが噂されていた。十二月二十日になって国府側の旧関東軍の藤田参謀が逮捕され、元竜泉ホテルにある中共軍司令部の三階に監禁されていた。参謀が捕まっては一大事と決死の従軍看護婦が、病気の看護を理由に潜り込み、持ち込んだシーツを引き裂き、縄をなつて闇に乗じて窓からの脱出に成功するなど、ギャング映画もどきの作戦が実行された。しかし、その後、潜伏先で運悪く再び捕まってしまった。年が明けて昭和二十一年、商売も手を替え品を替えて、商売の経験のない私は、結構面白味を感じていた。寒さも本格的になってきた一月十日、新京から疎開して来た中央政府の幹部たちと通化省の幹部たちが一斉に逮捕され、我々の集団からも二人が連行されて行った。これはまた何か起こる前兆かと不安が募るのだった。しかし異常もなく、生きんがための行商の毎日が続いた。

十 通化事件

それもつかの間の二月三日午前四時、電灯点滅二回を合図に突如として事件は起こった。これがいわゆる通化事件である。ことの詳細は知る由もないが、天然要害の地、通化を閔東軍最後の防衛拠点として投入していた一個師団の兵が、武装解除を潔しとせず山中に逃れ、報復の機をうかがっていた。一方、国民党も通化奪還を策し、それと行動を共にして武装蜂起をしたものだった。一時は、専員行署（元省公署）、公安局（警察署）など要衝を占領したが、しよせん、多勢に無勢、午後には形勢が逆転、中共軍の野砲や重火器を擁しての攻撃に、瞬く間に降伏してしまった。この動員には山の手の官舎に寄留した我々集団の職員、家族のうち、若者たちが切り込み隊に参加し、命を失ったものが少なからずいた。

もちろん、先の一月十日に捕まり牢につながれた政府の幹部たちは、奪還を阻止するため彼らによりいち早く手榴弾等で爆殺された。

後で分かったことだが、事前に連絡の密使が中共軍

に捕らわれ、作戦のすべてが事前に分かっしまいました、失敗に帰したのだった。

夕刻から直ちに成年男子の逮捕が始まった。時に満十七歳の私も連行される運命となった。後ろ手に針金で結わかれ数珠つなぎにされて、前後を銃剣をつけた兵が護送した。てっきり河原に連れて行かれ銃殺されるものと覚悟を決めた。ところが行き先は北朝鮮八路軍李紅光支隊の司令部であった。そこは元邦人経営の料亭跡で、入るや否や眼鏡と捕まるときに母が着せてくれた上衣を生意気だと取られてしまい、一人ずつ後ろ手に結わかれたまま、約百畳はあろう大広間に並んで座らされた。真ん中にダルマストロブが燃えており、その周辺には拳銃と着剣で武装した兵隊が頑張っている。そのうちに次々に捕らえられた者が連行されてきた。その数は百人は下らなかつたであろう。中には朝まで酷寒の屋外につながれていて足や手に凍傷を負い、歩行もできずに膝ではうような状態の者もいた。

二、三日たつと座敷の真ん中で取り調べが始まっ

た。私と多分一、二歳しか違わない、まだどこかあどけなささえ残っている少年戦車兵が、中央に引つ張り出され、少し偉そうなのが尋問する。「だれから命令を受けたのか?」「どこから武器を手に入れたのか?」等々敵しい尋問が投げかけられる。一部の者の策動で、彼らはただ武器を手渡され、従っただけで何ら知る由もないのだが、執拗に迫ってくる。返答をためらうとまづ裸にされる。お定まりの膝の関節に棒をかませる拷問から始まる。次に帯革で、背中を「ピシッ」と見舞ってくる。答弁に窮すると次はストープの薪である。さすがの日本男子たる者も、思いきり殴ってこられては万事休す。私は男の絶命のうめきというか、目を背けたくなる慟哭を眼前で見聞きし、そのつらさ、恐怖、ややもすると血の気を失いかけた。手を尽くせば蘇生する肉体も彼らには憎悪の塊でしかないのだ。すぐに座敷の中庭に放り出される。二月といえは酷寒、翌朝には凍死体となってしまう。それが毎日四人、五人と繰り返され、中庭は死体の山となる。

中には事件当日の朝、運悪く通化駅に着いたばかり

に捕らわれ、奥さんは殺されたのか、病死されたのか、幼い女兒二人を駅に置き去りにしたまま、連行されてきた人もいた。時がたつに従って、子を思う心は募るばかり。しかし、いかんともし難い。ついに発狂した父親は、警備の将校の腰の刀に手をかけた。驚き怒った将校の刀が一瞬ひらめいたが、不連の人で、打ち首とはならず、呻きのたうち回るだけ、そこに拳銃数発、絶命したのだった。その気の毒な父親はともかく二人の子供はどうなっただろう、悲劇というほかはない。

この地獄絵さながらの凄惨な場面に直面して、国を思うがゆえに志願した幾多の少年戦車兵、航空兵が、戦中ならともかく、戦後の出来事で前途有為なる少年が無残にも犬死にと同然に果ててしまった。この少年たちの心を思うとき、いたたまれぬ悔しさを涙ながらに感じるのだった。

私は幸いに、二、三回尋問を受けただけで十五日目に釈放されたが、その間、一日一食、それも高粱飯にキムチの汁をかけたものをどんぶりに一杯。最初に兵

隊が、最前列の者の手をほどこき飯を与える。食べ終わると後列の者の手をほどこき、どんぶりを渡してまた自分の手を結わいてもらおう、といった具合に順番に食べるわけであるが、連日の唐辛子攻めとビタミン不足のためか、目はショボショボになり唇はくっついてしまい、口を開けると血がしたたるような状態であった。それでも足に軽い凍傷を負っただけで、命があったのは幸運というよりほかはなかった。

日がたつにつれて、市中は平穩になっていった。この事件の犠牲者は二千とも三千ともいわれており、正確な数字は分からないが、戦後の出来事でわずか一週間余りの間に、通化地区だけで二千人を超える同胞が虐殺されたことは、世界でも例を見ないことではないだろうか。その戦死者、刑死者の大半は、渾江河畔、通化橋のたもとに廃棄物同然に埋められたという。幾星霜を過ぎた今日に至るまで、その霊は慰められることもなく、啾々としてすすり泣いていることだろう。嗚呼。

十一 事件後の生活

身体の回復を待って、生きんがための商いを始めたが、巷には親を失い、夫を失った孤児や未亡人の姿が目立って増え、中には持ち物を奪われ途方にくれている人が何人もいた。巻煙草、麦芽糖の飴などいろいろやってみたが、もうけは少なかった。労せずには儲からぬと、思い切って野菜売りを始めた。早朝に中国人の卸市場に行き、トマト専門に仕入れた。二つの籠に山盛りにしててんびん棒で担ぎ、邦人家庭を主に売り歩いた。動員で鍛えられた肩ではあるが、その重みはズシリと応える。十メートルほど歩くと休み、また担ぐといった調子で母がはかりを持って歩いて歩き、アイデアが良かったのか、ビタミン不足の人々に喜ばれ、体には応えたが結構良い商売になった。

三月になって、先の事件の戦勝記念と称して市内の繁華街の「玉宝興百貨店」の前で、例の関東軍参謀が事件の首謀者として、首から罪状を記した札を下げ、大衆の面前でさらし者にされていた。往年の無敵関東軍の参謀の最後にしては、何とも気の毒で見るに忍び

なかったが、どうにもならなかった。

このころになって、長い間の無理と栄養失調がたたって病に倒れる老人、子供が多くなり、しばしば葬式に参列することになって、土葬まで手伝うこともあった。

翌四月になると、国共内戦が近郊で行われるようになり、弾薬運搬や傷病兵の担架後送の使役に交替で出るようになった。私のときは幸い休戦状態になったので、戦火をくぐることはなかったが、彼らの越冬に要する燃料の運搬をやらされた。その燃料とは鉄道の枕木である。満鉄は標準軌であるため、日本の枕木よりも長く、そして土に埋まっているのでかなり重い。四人一組で午前一本、午後一本のノルマが課せられた。近くから始めたのが、毎日少しずつ遠くなるので、馬糧倉庫の乾草の寝床という悪条件に、高粱飯に大豆の副食の体には過酷な労働で、瘦身の私には精神力だけが頼りであった。これも旅中で学んだおかげと内心思ったのであったが、おまけに乾草の中に発生したノミの襲撃には、我慢と忍耐が輪をかけたのだった。

やがて疎開から一年を迎えるころ、どこからか内地帰国の情報が伝わり、小躍りして喜んだ。肉親の遺骨を持ち帰るため、土葬をしたものを掘り返し、なければの金で薪を求め茶毘に付している光景が各所に見られたが、肉体は土に返るのが自然と、そのままにして帰る決断をした方も少なくなかった。

十二 待ちに待った引揚げ

八月になって日本帰国が実現した。居住地区ごとに班を編成し、数班がまとまって団を組み、通化を脱出した。列車は軌道を取り外してあるので動かず、病人、老人、子供を大車に乗せ、元気な者は歩いた。途中、休戦ライン（幅二、三キロ）を通過して梅河口という奉吉線（奉天―吉林）の分岐点の街に着き、中国人の学校らしきところに仮泊が決まったが、ここで一大事が起こった。

先の休戦ラインを通過の際、農民が売りにきたマクワウリを買って食べた若夫婦のうち、主人が下痢を起し、瞬く間に脱水症状に陥り手の施しようがなくなった。そのうち看病していた奥さんの様子もおかしく

なってきた。土間にアンペラ（トウキビの皮で編んだ敷物）を敷いて、毛布一、二枚の寝床で、日本帰国を目前に懸命に生き抜かんと励まし合う新婚夫婦の真摯な姿は、「愛よいつまでも」という題のドキュメンタリーを地で行くようであった。急性コレラの病魔の仕事である。夜になって主人は息を引きとった。今だから言えることであるが、伝染病が発生するとその団は足止めされるのである。急遽、皆から多少のお金を出してもらい、近くの農家から薪を買い、井桁に積んで息を引きとるのを待って茶毘に付したのである。しかし奥さんの方は茶毘に付す時間的な余裕がなく、仕方なく農家から借りたスコップで穴を掘り、息を引きとるのを待って遺髪を切りとり、葬って手を合わせ、何も無かったように装い、翌朝の出発に備えた。

昨日まで元気に帰国を喜び、励まし合った仲間の悲哀に満ちた最後に、私たちが取った処置は非情そのもので、後ろ髪をひかれる思いであったが、そこには取り残されるといふ不安と危機感があったのである。合掌。

十三 引揚げ後の生活

悪夢の梅河口からは無蓋列車にゆられて奉天にたどり着き、鉄西の工場跡の集中営に収容され、一週間余り待機した後、錦州を経て壺蘆島から旧海軍の駆逐艦「なみかぜ」に乗船、懐かしの日本、博多に家族三人は帰国第一歩を印した。時に昭和二十一年十月であった。

故郷の熊本に行ったが、先に帰国した父と妹は上京していた。その父を追って私たち三人も上京し、親戚を訪ねて父の姉の家に寄ぐうしていた父を捜し当てた。その親戚にしばらく世話になり、やがて、先祖代々が仕えていた旧藩主の品川の別邸に住まわせていただくことになり、安住の家が決まった。早速、生活自立の道を考えねばならず、妹は新聞広告を見て神田の製菓会社に勤めることになり、私も親戚の紹介で日本橋の食品デパートに就職が決まったが、年末でもあったので最初は店頭で宝くじの販売を担当した。その時の出で立ちは、工員の着る菜っ葉服に地下足袋というかつこうで、とても今では考えられないものだった。

た。

そんなところに、外地の大学予科課程に在学していた者は特例で、内地の希望する大学に転入が認められるという話を聞き、多少気持ちが動いたが、とても進学できる状態ではなかったし、日本の将来もどうなるか展望が開けない時期でもあったので、進学はあきらめ、引き続き店で働くことにした。しかし、昭和二十五年四月になって突然、会社の都合で店が閉鎖されることになり退職する羽目になった。

わずか五年間の勤務だったが、その五年間で得た商売に対する興味と、その努力やアイデア次第で業績の向上が図れることに魅力を感じ、思い切って自営の道を選ぶことにした。父が渡満する以前に勤めていた農商務省の後輩から勧められて、茶を企業に納める仕事をしてきた。それを引き継ぎ別に小売店も開業し、本格的な茶舗を経営することになり、外売りと合わせて業績も安定し生活にも余裕ができるようになった。

哈爾浜の残照

東京都 木村 正美

一 はじめに

世界では、今でも百三十以上の地域で大小の内乱、騒擾、抗争などの血なまぐさい出来事が起きており、地球上の四分の一以上の人々が慢性的な飢餓にあえいでいる。そして日本のみ虚構の平和を、五十年以上も続けてきた。飽食の時代、道徳の低下から人々の価値観も多様化してきている。

しかし、私はまだ戦前・戦中のあの日本人としての優れた価値観を変えずに、というよりも変えきれずにいる日本人の一人である。消費が美德などとは、どうしても思えない人間である。過酷な時代を生き抜いてきた日本人の老いの練り言を、後世の人々にぜひ伝えたいと思ひ、懐かしの学舎まなびや、哈爾浜学院の終焉を中心に書いた。